

令和6年産大崎地域の 大豆作技術情報(第4号)

令和6年8月19日発行
宮城県大崎農業改良普及センター
TEL: 0229-91-0726 FAX: 0229-23-0910
<https://www.pref.miyagi.jp/site/osnokai/>

～栽培のポイント～

- ・天気予報に注意し、湿害・干害を防ぐほ場管理を行いましょう。
- ・大豆の生育ステージを確認し、病害虫防除を適期に行いましょう。

1 気象経過

- ・気温は、6月第1半旬を除き、平年よりも高く推移しました。
- ・6月第2～4半旬の長い少雨多照の期間がありましたが、7月第2半旬と第5半旬にまとまった降雨がありました。東北南部の梅雨入りは6月23日頃(平年より11日遅い)、梅雨明けは8月1日(平年より8日遅い)でした。
- ・今後も向こう1か月間程度は気温が高い状態が続くことが予想されます。

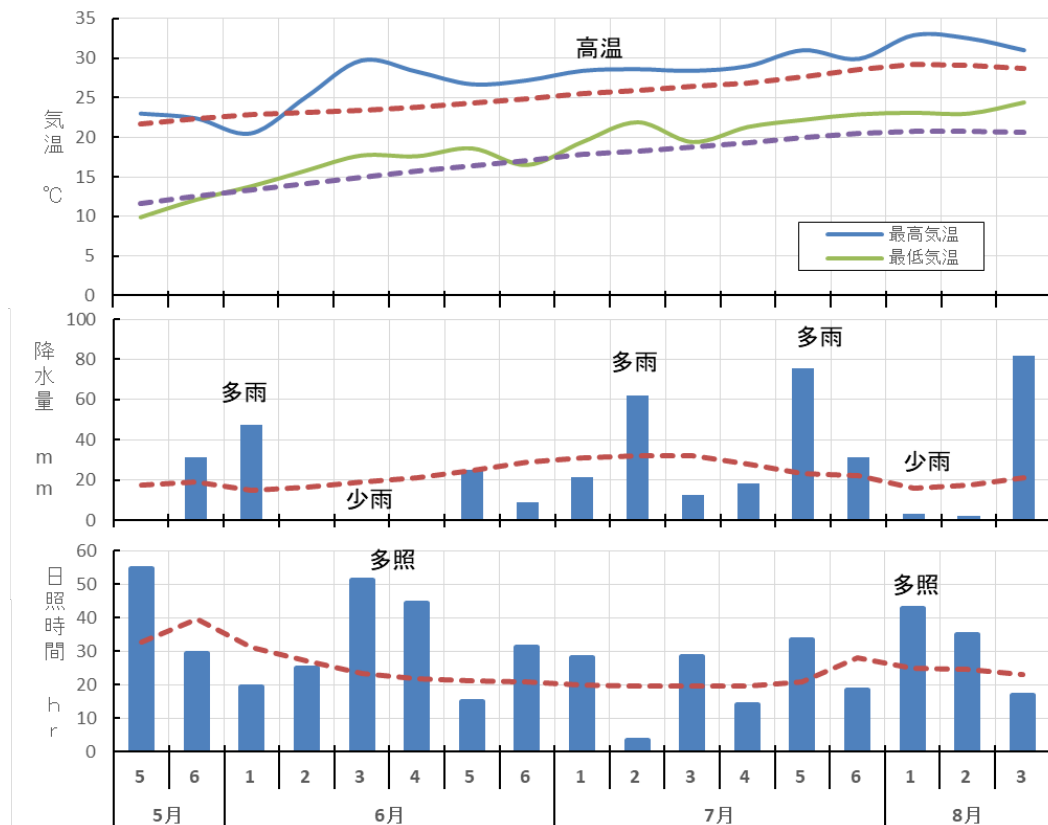


図1 5月第5半旬～8月第3半旬までの気象(古川アメダス)

※1 実線又は棒グラフが本年値、点線は平年値

東北太平洋側 1か月予報 (8月17日から9月16日) 8月15日仙台管区气象台発表

<向こう1か月の確率(%)>

<気温経過の確率(%)>

	低(少)	平年並	高(多)		低い	平年並	高い
【気温】	10	20	70	1週目	10	20	70
【降水量】	20	40	40	2週目	10	10	80
【日照時間】	20	40	40	3～4週目	10	30	60

2 生育概況(8月8日現在)

- ・6月27日播種の「古川タンレイ」は、平年より5日早い開花期となり、主茎長・主茎節数は平年・前年を上回るのに対して、分枝数は平年・前年を下回りました。
- ・平年より4日播種の遅かった「古川ミヤギシロメ」は、平年より3日早い開花期となり、いずれの生育量とも平年・前年を上回りました。「三本木ミヤギシロメ」は蔓化の傾向が認められます。
- ・6月1日播種の「古川きぬさやか」は7月29日に開花期となりました。
- ・いずれも6月8日播種の「すずみのり」の開花期は、小野田では7月30日、中新田では7月28日となり、前年より5～6日遅れています。両地区とも、主茎長・主茎節数は前年を上回っているのに対して、分枝数は前年を下回っています。

表1 生育調査結果

地区名 品種名	区分	播種日	開花期	8月10日		
				主茎長 (cm)	主茎節数 (節/本)	分枝数 (本/本)
古川 タンレイ	本年	5月27日	7月22日	80.8	16.1	3.0
	前年比	±0日	2日遅い	114%	106%	89%
	平年比	±0日	5日早い	134%	112%	87%
古川 ミヤギシロメ	本年	6月7日	8月2日	84.4	16.4	4.3
	前年比	5日遅い	2日遅い	112%	104%	158%
	平年比	4日遅い	3日早い	104%	104%	107%
三本木 ミヤギシロメ	本年	6月7日	7月30日	112.2	16.5	2.1
古川 きぬさやか	本年	6月1日	7月29日	76.5	14.2	3.4
小野田 すずみのり	本年	6月8日	7月30日	67.7	13.8	2.7
	前年比	±0日	5日遅い	143%	121%	74%
中新田 すずみのり	本年	6月8日	7月28日	94.6	15.3	2.2
	前年比	9日遅い	6日遅い	112%	103%	48%

※1 平年比は、前5カ年(令和元年～令和5年)の平均値との比較

※2 「三本木ミヤギシロメ」、「古川きぬさやか」は令和6年より調査開始

3 今後の栽培管理のポイント

(1) 湿害・干害対策

▶湿害対策 ー降雨が続く場合ー

子実が肥大する生育後期の土壌過湿は、根の呼吸阻害だけではなく、根粒菌の活性低下による窒素供給の抑制を引き起こし、減収につながります。

○降雨の前後に排水溝や明きよを点検し、排水が滞らないようにしましょう。

○水が溜まったところは溝を切り、明きよに繋げ、排水を促しましょう。

▶**干害対策** —晴天が10日以上続くような場合—

開花期以降は、大豆の養水分吸収が多くなる時期であり、土壌水分が不足すると落莢・不稔莢の増加、百粒重の低下を引き起こし、減収につながります。

○かん水が可能な場合は、排水溝や畦間内に土壌表面にしみ出す程度まで通水し、ほ場に水分を補給しましょう。

○暗きよの水甲を閉じ、土壌の水分保持に努めましょう。

(2) 病害虫防除

▶**紫斑病** —開花期後20～40日に1～2回防除—

○「タンレイ」は紫斑病抵抗性が“やや弱”であり、連作ほ場や成熟期に降雨が多い場合は多発するので、2回防除を徹底しましょう。

○同一系統の薬剤を多数回散布すると耐性菌が発生する恐れがあるので、2回防除の場合は異なる系統の薬剤を使用しましょう。

○収穫が遅くなると発生を助長するので、適期収穫に努め、できるだけ早く乾燥させましょう。



写真1 紫斑粒

▶**マメシンクイガ** —8月下旬に1回目、その7～10日後に2回目の防除—

○羽化した成虫やふ化直後の幼虫に対する防除が効果的です。

○大豆を連作すると、越冬幼虫が増加し、食害の発生が多くなるので、連作ほ場の発生状況に注意しましょう。



写真2 マメシンクイガ幼虫

▶**フタスジヒメハムシ** —8月下旬～9月上旬に防除—

○8月下旬頃までの若莢を食害することで、そこからカビが入り込み、汚粒（黒斑粒）や腐敗粒となります。作付け初年目から被害が出やすい傾向にあります。



写真3 フタスジヒメハムシ成虫

▶**ジャガイモヒゲナガアブラムシ** —8月～9月に防除—

○8月下旬～9月上旬に急激に発生すると、吸汁害に伴う早期落葉により、収量・品質に大きな被害が出ます。

○種子塗布処理をしていない場合は、生育後半の発生密度が高くなることもあるので、注意してください。



写真4 ジャガイモヒゲナガアブラムシ成虫

▶カメムシ類 —他の主要害虫との同時防除—

○若莢が着き始める頃から莢が黄熟する頃までの莢内の子実を吸汁加害します。

○防除は着莢期から子実肥大中期を重点に、他の主要害虫と同時に2回以上実施するようにしましょう。

※病害虫防除所 8月5日発行の「発生予報第7号—大豆—」では、7月25～30日の巡回調査における「吸実性カメムシ類」の地点あたり寄生頭数は平年より多く、高温予報も発生に好適であることから8月下旬までの発生量は「やや多」と予想されています。



写真5 ホソハリカメムシ成虫

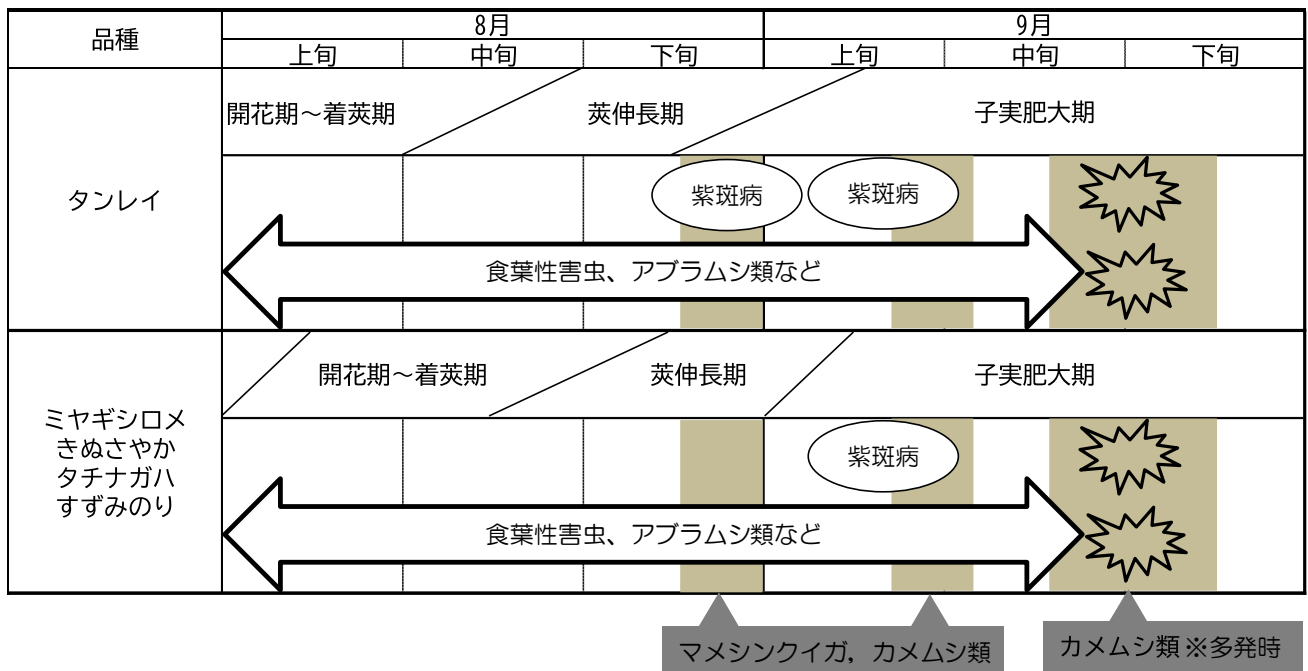


図2 病害虫防除体系例

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆農薬危害防止運動（6月1日～8月31日）◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

6月から8月にかけて、農作物等の病害虫が発生しやすく、農薬を使用する機会が最も多くなる時期です。農薬安全対策の不備や不注意等による事故が発生しやすくなるため、農薬使用による危害防止と環境に配慮した適正な農薬の使用を徹底しましょう。

運動のテーマ 「守ろう 農薬ラベル、確かめよう 周囲の状況」

「大崎地域の稲作技術情報」、「大崎地域の大豆作技術情報」、「大崎地域の麦作技術情報」は、当普及センターのホームページでもご覧いただけます。インターネットで「大崎農業改良普及センター」と検索または右のQRコードを読み取ってください。

